

フィールドからの学び

1 不登校児合同体験学習の概要

不登校児合同体験学習では、キャンプ療法を取り入れた活動を行っている。

本年度は、春キャンプ・夏キャンプ・秋キャンプ・デイキャンプ・スキーキャンプを計画、実施した。実施期日・会場・日程の概要は以下の通りである。

表1 春キャンプ（総合教育センター他）6月17日～18日

1日目		2日目	
午前	総合教育センター集合 キャンププログラム 体育館で仲間作り 昼食（お弁当） 総合教育センター出発	午前	起床・朝の集い 基本プログラム 食事作り（朝食・昼食の弁当） 朝食 総合教育センター～華蔵寺公園（徒歩）
午後	キャンププログラム 渡し船にのるぞ 夕食の食材購入 総合教育センター到着 基本プログラム 食事作り・バイキングメニュー	午後	キャンププログラム 華蔵寺公園遊園地ヘレッツゴー 昼食 華蔵寺公園～総合教育センター（徒歩） 解散
夜	夕食（セレクト方式） キャンププログラム きもだめし 就寝		

表2 夏キャンプ（桐生青少年野外活動センター）8月10日～13日

1日目		2日目	
午前	総合教育センター集合・出発 キャンププログラム 食材の買い出し 桐生青少年野外活動センター到着 昼食（お弁当） 入所式・オリエンテーション	午前	起床・朝の集い・清掃 基本プログラム 食事作り（朝食・昼食の弁当） 朝食
午後	キャンププログラム みんなでスポーツ 基本プログラム 食事作り・バーベキュー	午後	キャンププログラム 自然と遊ぼう（化石採集・山登り） 昼食 基本プログラム 食事作り（夕食）
夜	夕食 キャンププログラム キャンプファイヤー 入浴・就寝	夜	夕食 きもだめし 入浴・フリータイム・就寝

3日目		4日目	
午前	魚つり（希望者のみ） 起床・朝の集い・清掃 基本プログラム 食事作り（朝食・昼食の弁当） 朝食	午前	起床・朝の集い・清掃 朝食・休憩・荷物整理 キャンプの振り返り 退所式 野外活動センター 出発 教育センター 着 解散
午後	キャンププログラム 川で遊ぼう 昼食 基本プログラム 食事作り・バイキングメニュー	午後	
夜	夕食（さよならパーティ） 入浴・フリータイム・就 寝		

表3 秋キャンプ（北毛青年の家）10月5日～8日

1日目		2日目	
午前	総合教育センター集合・出発 キャンププログラム 食材の買い出し 北毛青年の家 到着 昼食（弁当）休憩	午前	起床・朝の集い・清掃 基本プログラム 食事作り（朝食・昼食の弁当） 朝食
午後	入所式・オリエンテーション キャンププログラム 仲間作り・アイスブレイク キャンプサイトの見学	午後	昼食 キャンププログラム ウォークラリー
夜	基本プログラム 食事作り・バーベキュー 翌日の活動計画を話し合おう 入浴・就寝	夜	夕食 入浴 翌日の活動計画を話し合おう 就寝

3日目		4日目	
午前	起床・朝の集い・清掃 基本プログラム 食事作り（朝食・昼食の弁当） 朝食	午前	起床・朝の集い・清掃 朝食・荷物整理 キャンプの振り返り 退所式 北毛青年の家 出発 教育センター 到着
午後	キャンププログラム ドッチボール・空き缶積み	午後	

後	昼食	キャンプの振り返り（親面接） 解散
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> キャンププログラム コース別活動プログラム アスレチックコース グランドコース </div> おしゃべりタイム（個別面接）	
夜	夕食 天文台見学（希望者） きもだめし（希望者） 入浴・フリータイム・就寝	

表4 デイキャンプ（桐生青少年野外活動センター）11月18日
1日目

午前	総合教育センター 出発 野外活動センター 到着	秋キャンプの同窓会をかねて実施。 保護者の参加も募り、ウォークラリーを実施。 子どもチーム（同学年班）・親チームに分かれて、ウォークラリーの課題に挑戦。
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> キャンププログラム ウォークラリー （子どもチーム・保護者チーム） 途中で 昼食タイム（弁当） </div>	
午後	野外活動センター 出発	
後	総合教育センター 到着 解散	

表5 スキーキャンプ（水上宝台樹スキー場）12月21日・22日
1日目 2日目

午前	総合教育センター 出発 水上宝台樹スキー場 到着 荷物整理 昼食 スキー準備	午後 起床・荷物整理 朝食 スキー準備 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> キャンププログラム スキー講習会 （スタッフと滑る） </div>
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> キャンププログラム スキー講習会 （インストラクターの指導） （スタッフの指導） </div>	
午後	夕食	昼食
夜	入浴	午後 荷物整理
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> キャンププログラム 仲間作りをしよう （新聞紙で遊ぼう・他） </div> 就寝	水上宝台樹スキー場 出発 総合教育センター 到着 解散

2 実践事例からの学び

(1) 食事作りは、問題解決の基本プログラム

宿泊を伴うキャンプ活動においては、食事場が何度も訪れる。弁当や外食でまかなうという方法も選択できるが、自分で食べるものは自分で作るという体験は、「自立」を促す意味においても重要な経験と考える。また、食事作りの場面は、多くの活動場面を含み一人一人の問題解決能力の向上を図る上で有効な活動であることを実感した。

課題解決場面として

夏キャンプの食事作りの班は子ども同士の交流、上級生のリーダーとしての活動の促進を図るためスタッフ側で意図的に編成した。また、子どもの活動を重視するため、なるべくスタッフは子どもが主体的に活動できるよう支援していった。

子どもたちが献立をたて、買い出しから食事作りまでを実施することにより課題解決場面を体験することや、一緒に食事を作り、食事をする事など、子ども同士が交流することを通して関係作りのスキルを学ぶことを意図して実施した。また、夏キャンプの反省から、秋キャンプの食事づくりは、各グループのスタッフを減らし二人とし、子どもたちの交流の促進を図ることを意図して実施した。この点、これまでのキャンプと比べ、子ども同士で相談し作業を進める場面が多くなり、問題解決を互いに共有し、主体的に参加するようになったといえる。それぞれの取組を自らと仲間やスタッフなど他者からの評価により、子どもたちは自分自身に少しずつ自信を持つことができたようである。

それぞれの課題解決場面は以下のように捉えられる。

表6 子どもにとっての食事作り

<p>豊富な活動場面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メニュー作り・材料調達（買い出し） ・調理・食事・片づけ <p>といった活動場面があり、それぞれの場面でさまざまな課題に直面し、解決に向けた取組が必要になる。</p> <p>具体的な課題となるもの（身につけたい力）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メニュー作り 食べたいものを出し合う、決める（自己決定、他者との折り合い） 作り方を確認する（自己理解） ・材料調達 食材を選ぶ（先を見通す・計画性） 買い物の仕方を学ぶ（商品の選び方、会計） ・調理 調理方法を考える（自己決定・創意工夫） 調理をする（調理技能の向上・他者との協力） ・食事 誰と食べるか（自己決定・コミュニケーション） ・片づけ 何をどのように片づけるか （自己決定・他者との協力・責任・耐性）

表7 指導者にとっての食事作り

<p>豊富な支援場面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・左記の子どもの活動場面に即して個に応じた臨機応変な対応、支援が要求される。 <p>具体的な支援課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己決定、自己表現を促す ・気持ちの代弁者（補助自我） ・活動の割り振り、誘導、励まし ・言動の賞賛、承認 <p>支援の言葉かけの例</p> <p>「いい考えだね」 「自分の好きなものでいいんだよ」 「納豆好きじゃないんだけどな」 「そんなの難しいよね」 「ちょっとこれ手伝ってくれるかな」 「上手だね、その調子だよ」 「どこで食べようか」 「さんが作ったのおいしいね」 「手が冷たいけど、もう少しだからがんばろう」 「みんなでやると早くできるね」</p>
--

承認の場として

食事作りでは、自分の特技を發揮したり、他者と協力したり、工夫したりするといった場面が豊富にあり、一人一人の活躍場面が期待でき、誰もが承認されるチャンスがたくさんある。「いい考えだね」(創意工夫の賞賛)「上手だね」(技能の賞賛)「手伝ってくれてありがとう」(協力への感謝)「さんが火の番をしてくれたおかげだよ」(役割遂行の承認)「おいしいね」(感謝、賞賛)といった肯定的な言葉かけの場面が豊富にあり、こうした言葉かけを繰り返し行うことで(承認のシャワー)、自尊感情を高め、活動意欲を高めることができることを実感した。

承認の具体的事例 詳細は総合教育センター収蔵の研究報告書218集参照 以降同様

コミュニケーションの促進の場として

小集団で食事作りをすることで、他者への抵抗感や対人不安が少なくなると思われる。わからないことを聞いたり、相談し合って作るという活動が自然に行える。一人では、できなかつたり、手間がかかたりすることも多く、協力し合うことが必要になる場面も多く、誰かと一緒に作業をするということが自然にできるようになる。また、食事の場面では、自分たちが作った料理という共通の話題があり、誰もが会話に参加できるという利点を生かすことができる。同じ作業を一緒に行うことは心理的な距離を縮めるには適切な活動であり、複数の人間が入り交じって活動をすることで、三者関係が自然な形で生まれやすくなると感じた。食事を作るたびに、それぞれの役割が決まっていき、それぞれが意欲的な活動をすることができたと思う。そのことで、短時間で食事を用意することもできた。「ともに汗を流し食事を作り、出来上がったものをみんなで食べる」ことを通して、関係が深まっていくのを感じることができた。

買い出し場面での交流の様子

食事作りを通して交流が広がっていく様子(秋キャンプでの事例)

子ども同士の相互交流を促進する意図をもってかかわってきた3日間の食事作りを通して、子ども同士が互いを認め合うふれあいから、子どもは安心感と喜びを感じ、自らを開いたり、仲間とつながろうと働きかけたりする姿が感じられた。

(2) アセスメントの繰り返しが、よりよい支援につながる

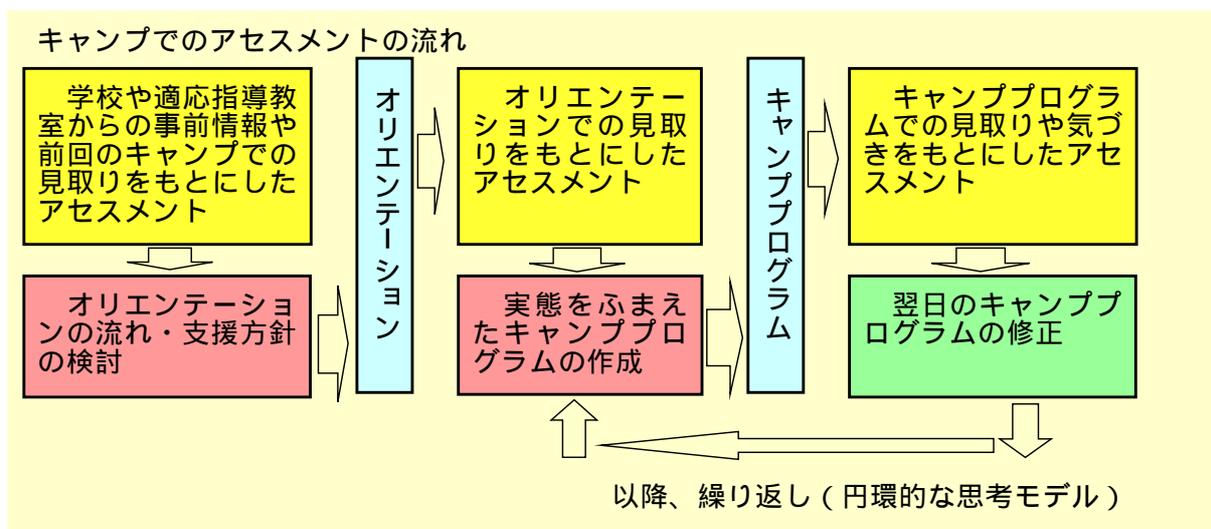


図4 キャンプアセスメントの流れ

子どもの態様は常に変化しており、その変化に対応した適切な支援が必要である。そのため、事前の支援計画や活動プログラムは子どもの変容に合わせて、随時修正を加えるものという柔軟な思考が求められる。

キャンプでは、事前の基礎情報をもとにオリエンテーションの流れを考える。オリエンテーションで実際に子どもたちとふれあう中で得られた新たな情報をスタッフ会議で共有しあい、キャンプ本番のプログラムに生かしていく。キャンプ中は、担当班や子どもの活動の様子により臨機応変に適切な支援ができるよう心がけている。子どもたちの就寝後、スタッフ会議を行い、その日の個々の活動の様子からの気づきや見取りを出し合い、翌日の支援方針を検討したり時にはプログラムの内容を変更してきた。

子どもの実態は常に変化しており、予定していたプログラムでは実態にそぐわないと判断されれば、実態に即したものと変更していく。

子どもがつまずいたときに出せるオプションはもっているがそれを出さず出さないかは子どものニーズに応じて決めるというスタンスでいることが大切ということもスタッフ会議の中で出された。

ゆったりとした時間の流れの中で、活動をすることも大切にしたい。

夜のスタッフ会議では、子ども一人一人について、担当カウンセラーを中心に活動状況から見取ったことを基にして、スタッフ全員でアセスメントを深めた。

そして、翌日からの支援目標について協議し、共通理解を図り支援に生かしていった。また、

夏キャンプ用アセスメントシート

学校や適応指導教室から得た情報を一覧表にし、それをもとに支援方針をたてキャンプに活用した。子どもたちの活動を二者関係、三者関係などの関係性で見とったり、指導者は、課題解決の場面でのかかわりなどをみながら、夜のスタッフ会議で子どもたちの活動の様子を出し合い、アセスメントを行い、翌日の支援方針の修正・立案に生かした。

	A男	B男	C子
援助・指導を行う際の留意点や配慮事項			
健康			
育てたい力 (学校復帰を図る上で必要なこと)			
支援方針			
短期目標			
1日目			
4日目			

秋キャンプ用アセスメントシート

秋キャンプでは、夏キャンプ後の適応指導教室、子どもの面接、保護者への面接をもとに、支援シートを作成した。また、面接から得られた子どもの願いや保護者の願いを基礎情報として加え、ひとり1ページのシートとして記入できるようにし、翌日の支援目標を記入できるように工夫した。

援助・指導を行う際の留意点や配慮事項

子面接から	親面接から
-------	-------

↓

スタッフの支援方針

	キャンプ活動からの見取り(行動、心理、会話など)	支援目標
5日		
8日		

活動プログラムについて子ども同士のかかわりや活動状況について協議、プログラムの有効性について検討、スタッフが次の活動で配慮しなければならないことを明確にした。(アセスメントシートを活用)

また、子どもの個人面接の時間(おしゃべりタイム)を取り入れ、自己のキャンプへの思いが達成できているのか、不安な気持ちを抱えていないか、個々に面接を行い、状況を把握すると共に、子どもの内面を理解し、共通理解を図って支援に役立てた。

夏キャンプ2日目の夜のスタッフミーティング

2日目夜のスタッフミーティングでは、1日目、2日目を終えた子どもたちの様子を踏まえ、川遊び活動について検討した。2日目夕方にキャンプスタッフ2名で、子どもたちが川遊びを実施する場所で安全確認(水温及び水量、危険箇所、スタッフの配置地点、川遊びエリア、ライフジャケットの確認など)を行った。

その結果報告を受けて、以下のような点についてプログラムの再検討をした。

- ・子どもたちの安全の確保に万全を期すためにはどうしたらよいであろうか。
- ・活動内容が、子どもたちの実態、合同体験学習の趣旨に即した活動内容であるかどうか再検討する必要があるのではないか。

検討の結果、当初計画していた活動内容である「ゴムチューブでの川下り」についてプログラムの変更を決定した。その理由として、

- ・子どもたちの泳力について、十分な実態把握ができていないこと。
- ・川遊びエリア近辺で水難事故などが発生するなどのことから、子どもたちの安全の確保には、万全を期す必要があること。
- ・子どもたちの合同体験キャンプのねらいに立ち返ったときに、冒険的要素を盛り込むよりも、安全な川遊びエリアで子ども同士のふれあいから遊びのフィールドで遊びを発見しながら、相互交流を図れるように計画した方がねらい達成に迫れるのではないか。

スタッフミーティングの結果、3日目の活動プログラムの修正を図り、時刻はおよその目安としながら、子どもたちの活動状況に即して行うこととした。

(3) 情報の共有に基づく「一致した支援」(意図の確認)が大切

スタッフ会議でのアセスメント情報をもとに実際に子どもに接する時には、相手、時、場に応じた適切な支援が要求される。同じ場面でも、どんな力を身につけさせたいかによって支援の言葉かけを変える必要がある。何を目指しての支援か、意図を明確にしたかかわりが大切となる。プログラムは子どもの変容を促すための手段の一つであり、プログラムの実施が目的にならないように留意することが大切である。

意図を明確にして支援した例

事前に、プログラムの中で何をどのように支援するかという「意図」を確認しあい、共通の認識を持って支援を行ったことで、子どもへの声かけが一致した内容となった。

二者から三者への広がり意識した場面設定となるように、こちらがきちんと意図として持っているかどうかで、かかわりが違ってくる。自己効力感をもたせることにねらいをもっていけば、「がんばれ」「もう少しでできるよ」などの励ましの声かけは個人に対して行われるが、他者との関係を広げるといふねらいをもっていけば、他の子の励ましの言葉をとらえて「励ましてくれてる人がいるよ」「いい励ましができたね」という声かけが必要になるということを実践を通して学んだ。

(4) 主役は子ども（自助資源の有効活用）

キャンプでの活動の主体は子どもである。スタッフ会議でのアセスメントをもとに、承認の場を設け、自尊感情を高められるよう、一人一人の長所や特技、可能性といった内的資源を生かせる場面が取り入れられるようなプログラムの実施を心がけてきた。

夏キャンプでは、子どもが活動内容を企画し、班別での活動を中心にした活動となるように企画した。子どもの思いや希望を生かしながら、関係に広がり生まれるようなプログラムとなるよう支援した。

夏キャンプでの事例

第1回・第2回オリエンテーションにおいて、把握した子どもたちの実態と各適応指導教室の指導員から見た「キャンプ参加により育てたい力・学校復帰を図る上で必要なこと」を考慮し、三泊四日のキャンプの最初の段階に、「子ども同士」、「スタッフと子ども」のふれあう場が必要ととらえ、設定した。この場面において、スタッフは、子どもの実態や課題の把握に努め、子どもたちとスタッフの課題解決に向けたキャンプ中のプログラムの修正に結びつけたいと考えた。

子どもの思い・希望

- ・みんなでいっしょに一つの競技ができる。三泊四日の最初なのでばらばらでしたくない。みんなで仲良くなりたい。個々の好きな種目にわかれて小グループで活動するのではなく、みんなで一つの種目に取り組みたい。
- ・ルールは、柔軟にとらえ、相談しながらその場で決めていきたい。
- ・子どもとスタッフも混ざり、協力して取り組みたい。

指導者の意図

- ・キャンプのはじまりとしての人間関係づくりの場とする。子どもと子ども、子どもと指導者、指導者と指導者間、また、二者関係から三者関係での交流の場の設定をする。
- ・子どもたちが提案したように、競技途中で対話しながら柔軟にルールを決めることによる交流の場の設定をする。
- ・子ども一人一人の実態把握と共に、指導者の課題把握と修正、以後のプログラムにおける修正をする。
- ・事前の担当班の子どもたちの思いや願い（事前のオリエンテーション）をもとにしての企画の実現により子どもたちに達成感を味わわせる。
- ・人間関係づくりの広がり場の実現へ向けて、子どもたちの人間関係づくりの場となり、より広く多くの人と触れ合う場とする。

初日のラケットベースでの事例

キャンプ初日の午後、芝生のグラウンドで「みんなでスポーツ」班の子どもが、事前の第2回オリエンテーションで企画した「ラケットベース」をやろうと投げかけた。皆がそれに賛同し、チーム分けをすることになった。チーム分けの仕方について、子どもたちから意見が出され、力が公平になるように大人であるスタッフと子どもたちが二つに分かれてやろうということになった。そこで、スタッフ同士、子ども同士がじゃんけんをし、対戦チームを作った。ルールも、スタッフと子どもがいっしょに相談しながら柔軟に決めることができた。そのため、子どもとスタッフとが同じように全員で対戦に参加することができた。接戦が続く、白熱した展開となり、子どもたちも力一杯活動することができた。しかし、その一方で、参加できない子どももいた。みんなで交流する活動を通し、子どもの実態をつかむとともに、以後のキャンププログラムを展開する上で、支援者側の課題の把握と修正が迫られる場であった。

秋キャンプでは、児童生徒がスタッフの力をなるべく借りないで、自分たちの力で食事を作ったり、活動プログラムを企画し運営する経験をさらに充実させたいと考えた。夏キャンプでは、スタッフと子どもとの交流が促進され、当初のねらいを達成するものであった。しかし、大人と子ども関係は、良好な関係を構築できたものの、子どもと子どもの関係を促進するかかわり及び支援が足りなかった反省をもとに、秋キャンプでは、子ども同士の相互交流を促進させることをねらいとした。その中で、子どもが、新たな自己発見をし、問題解決能力を培えるようにしたいと考えた。また、異学年や同学年で交流の機会を作り、交友関係を深め、社会性を学んだり、仲間意識を広げたりする場を設定した。さらに、日程的にキャンプ全体の流れにゆとりを持たせ、3日目には、フリータイムを設定し、キャンプサイトでの活動をもとに子どもたちの部屋を男女1部屋ずつにして、子どもたちが自然な形で交流できる場を多く設けられるようにした。

プログラム作りにおいて、3日目のフリータイムでの子どもたちの交流につながるために工夫した点は次の通りである。

1点目は、遊びのルール作りをリーダー（中3生徒）が中心となって子どもたちの話し合いで決めていくことである。そのために、班長会議（中3生徒で構成された5名）を充実させ、中3生徒が中心となった主体的な活動を支援しようと考えた。子どもたちのルール作りは、遊戯療法におけるクライアントが決めてカウンセラーが寄り添う考えによるものである。

2点目は、遊びのアイテムである。子ども同士の活動により、遊びが発展できるようなアイテムを用意することが重要であると考えた。例えば、フリスビーは、二人で投げ合うことから始まり、その発展として複数で輪になって自由に投げ合うことができる。また、力強くフライングディスク大会のような本格的なもの、ターゲットを決めて競い合うなど、自分たちでルールや方法を決めて、楽しむことができる。フリスビーの他に、空き缶やフープ、当たっても痛くない柔らかなゴムボール、長縄などを用意した。

3点目は、子どもがプログラムを選択できるようにすることである。子どもが自分の興味関心に即して参加できるようにするとともに、休憩を入れるために参加しないなどの自己決定も認めていくようにした。

秋キャンプでの事例

活動の選択肢を広げるという意図を持って行った朝の散歩での活動は、結果として子どもたちの希望として上がることはなかった。事前の子どもとの面接では、イニシアチブゲームを楽しみにしている子もいたのだが、これも希望に上がることがなかった。多くの子どもたちにとってイニシアチブゲームに対する具体的なイメージがなかったことが予想される。子どもたちが強く希望したものはいずれもキャンプの中でやったことのあるものばかりであったことから、活動のイメージの有無が選択の方向を強く規定していることが予想される。

子どもたちの関心がどこにあるか適切に把握し、活動についての十分な情報を与え、活動のイメージをきちんと持たせた上で、選択させていくことが大切であることを実感した。

(5) 信頼関係に基づく支援により期待できる子どもの変容

キャンプの空間は、信頼関係を基盤にした安心感とゆとりがある空間となっている。

信頼関係を結ぶための支援のポイントは次の通りである。

表 8 支援のポイント

<p>個に対して・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常にスタッフが近くに寄り添い、活動を共にしながら、受容、共感的な態度で接する。 ・交流場面では気持ちの代弁者としてかわり、表現を助けたり、存在感を高める。 ・他の子どもとの交流のきっかけとなりそうな機会を設定し、一緒に参加しながら心的不安を和らげる。 ・自力で解決できたことを賞賛したり、自己決定したことを受容したりしながら、自尊心を高めていくことを通して、自分の言動に自信を持たせ、自分から他者にかかわっていくことにつなげていく。 <p>集団に対して・・・</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新メンバーが抵抗なく入れるようなアイスブレイクのエクササイズを実行しながら、全体の交流を促進していく。 ・既知のメンバーとの交流に偏らないように配慮しながら、新メンバーへのかかわりを促し、賞賛していく。 ・協力して活動したり課題を解決する場面を設定し、できたことを認め合うなかで、ともに活動する良さを実感できるようにしていく。
--

こうした支援を行うことで期待できる子どもの変容は、対人不安の軽減、自己表現への意欲の向上、自己決定力・自力解決力・責任遂行力の向上、達成感・所属感の獲得、二者関係から三者関係への広がり、縦の関係から横の関係への広がり、他者との折り合いの付け方の向上、などがあげられる。

この中で、二者関係から三者関係へ・縦の関係から横の関係への広がりには有効なかかわりとなったのが大学生の存在である。

大学生がスタッフとして参加したのは夏キャンプからである。子どもは、比較的年齢の近い大学生とキャンププログラムを通して、交流を深めたり、個人的に悩みを相談したりすることができた。子どもにとってお兄さん、お姉さんの存在の大学生とのかかわりは大変有意義なものであった。秋キャンプには、オリエンテーションから参加してもらい、集団にとけ込みにくい子への支援・指導をはじめ、子どもとの関係作りを通して大きな成果をあげることができた。活動プログラムを盛り上げたり、個人的に話を聞いたりして、子どもの不安を軽減し、キャンプ生活を充実させることができた。こうした大学生との斜めの関係が関係の広がりには有効な支援となることがわかった。

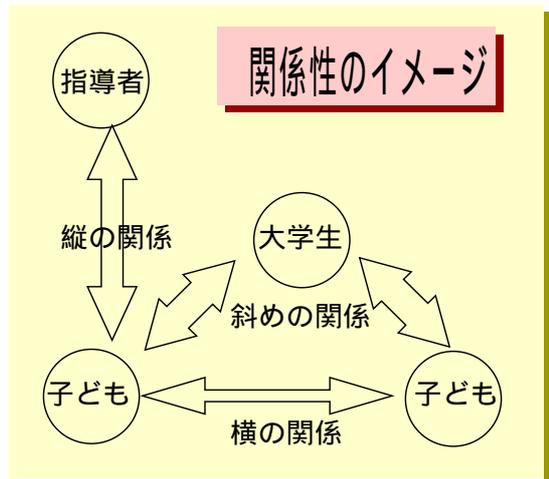


図 5 関係性のイメージ図

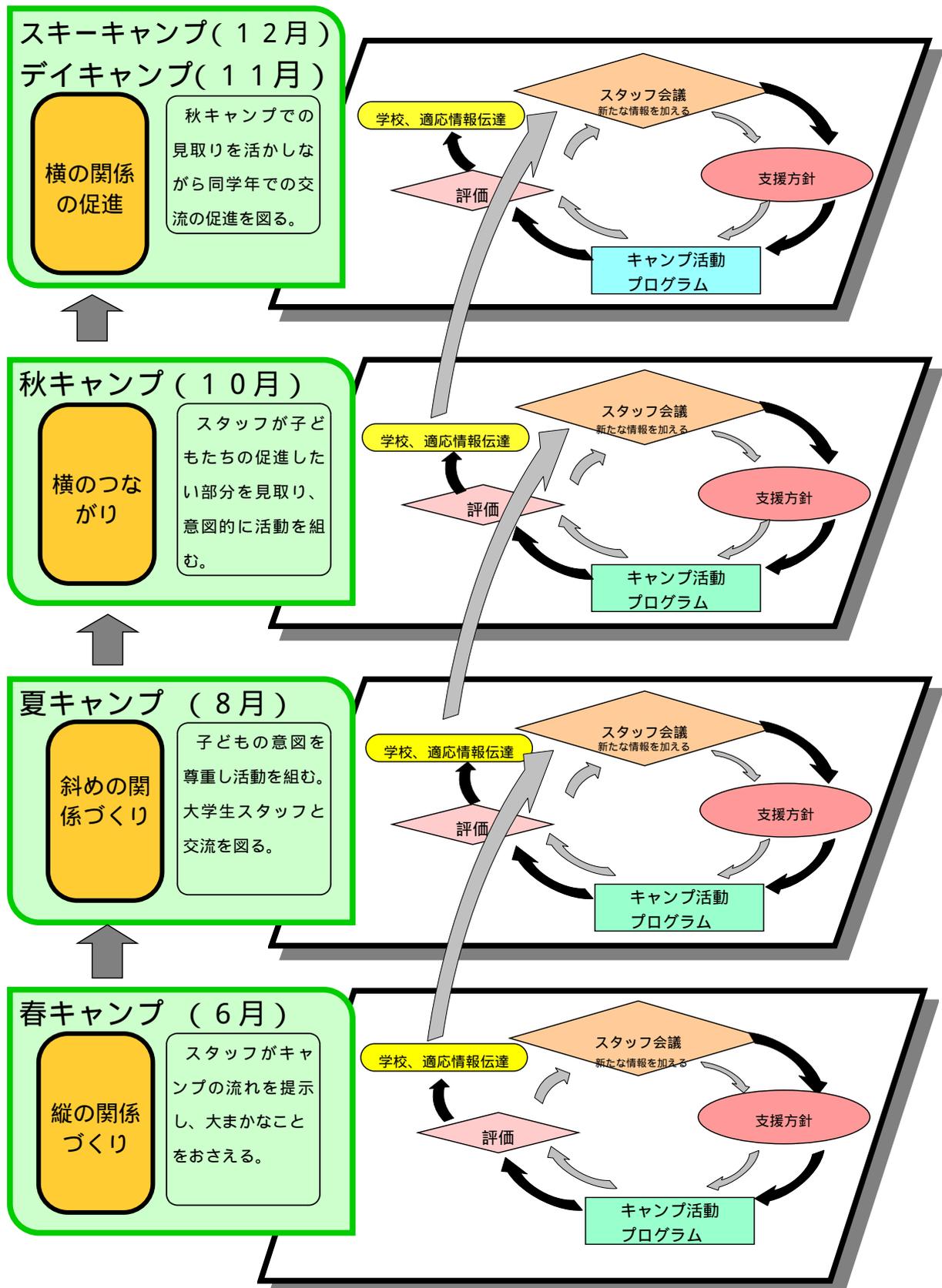
(6) 円環的な思考をもとに支援方針を検討し、人間関係を広げる

キャンプ活動を行うに当たって、スタッフ会議を開き参加する子ども一人一人についてアセスメントを行い、プログラム作成や支援方針に生かしている。それぞれのキャンプは、1回で終結となるよう計画しているが、継続して参加する子どもも多く、前回のキャンプでの様子を加えたアセスメントを行い、発展的な内容となるような工夫をしている。5回のキャンプに共通したねらいは「人間関係の広がり」である。支援のポイントは、個の内面へのかかわりとして「安心」「自信」「挑戦」「促進」という発展的な支援と他者とのかかわりとして、「縦の関係」「斜めの関係」「横の関係」という広がりを目指したプログラムの実施と支援を行ってきた。こうした支援は5回のキャンプ全体を通さなければ完結できないというものではなく、個の実態に応じて、その都度、臨機応変に行ってきたものである。

5回のキャンプ全体を通しての人間関係の広がりイメージ図は以下の通りである。

人間関係を広げるためのキャンプ実践

不登校児合同体験学習をPLAN DO CHECK ACTIONのように円環的に支援するように実施していった。



不登校児体験学習に参加した子どもたち22人（男子9人、女子13人）の変容の様子については、以下に示すとおりである。

キャンプ参加児童生徒の変容の様子

参加者名	相談機関	関係機関からの基礎情報	参加状況				キャンプ後の変容 <small>スタッフ以外から得た情報(親、適応指導員、相談員、SCなど)</small>
			春	夏	秋	デス	
A	適	小さい頃から友だちとのかか					・自分から会話に加われ、人と接すること いかない。

適応 適応指導教室、SC スクールカウンセラー、
春 春キャンプ、夏 夏キャンプ、秋 秋キャンプ、デ デイキャンプ、ス スキーキャンプ

キャンプを実施するごとに同学年同士の関係が広がりを見せた例

A男の変容・B男の変容

A男とB男との関係性の広がり

A男とB男は、各キャンプを通じて徐々に関係の広がりができ、デイキャンプを通して同学年同士のかかわりができてきたと考える。デイキャンプ以後、それぞれ自分の進路に向かうことができている。A男とB男の関係を表すと下図のようになる。

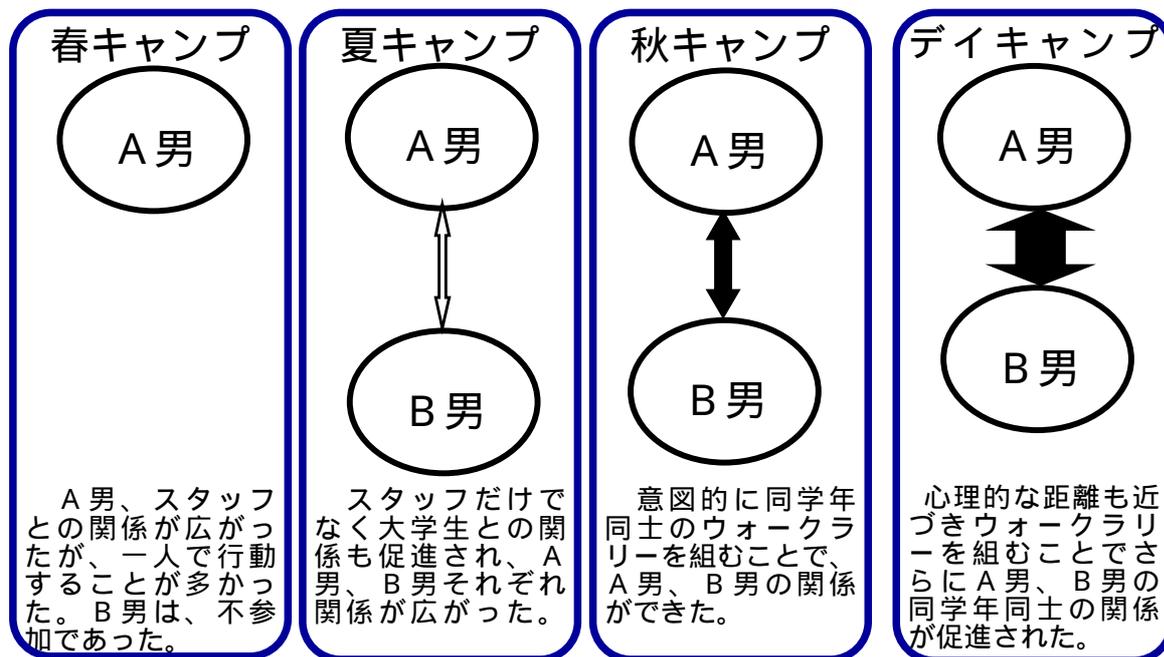


図6 A男とB男の関係（矢印の太さは、関係性を表したもの）

* ウォークラリーは、本来は各班ごとに点数制で競うものであるが、点数はあまり重視せず、関係性を重視した。2時間で一周できるコースであるが時間にこだわらず、午後の時間を十分使い、子どもたちの自主的・自発的な活動を促進するよう工夫した。

キャンプでの支援は1回毎のキャンプで終結し、その都度、学校復帰を目指しているが、継続して参加する子どもは、前回の活動もふまえたアセスメントをし、支援方針をたて、キャンプ活動で変容を見取るという円環的な支援により変容が見られたケースである。

秋キャンプで学校復帰できた例

の変容 キャンプ活動の有効性の考察

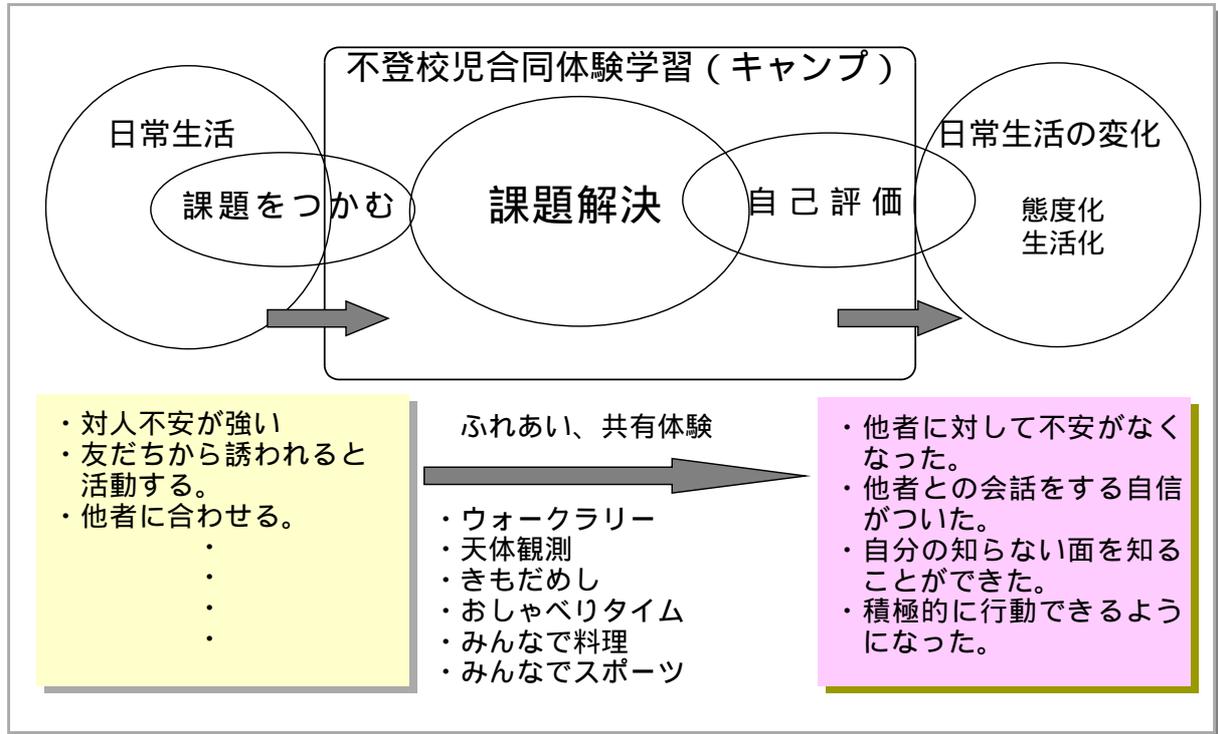


図7 の変容

上記のように、 が変容したのは、食事作り、ウォークラリーやきもだめしなどの同学年での交流の中で、自分の気持ちを遠慮せずに言える関係ができ、自分の言動に自信が持てるようになったことがあげられる。

3日目午後のおしゃべりタイム(子どもとの面接)では、「・・・今までは、ひとに合わせてばかりいたけれど、自分の意志で行動できるようになった」と話すなど、自分の変容に気づいたことが、その後の行動の変化につながったと考える。

(7) 外部機関との連携をもとに、よりよい支援を

保護者との連携

保護者との連携という観点から、オリエンテーションへの参加、親面接の実施(個別・集団)、デイキャンプへの参加を促してきた。オリエンテーションでは、子どもたちが仲間作りの活動をしている間、個別面接を行い保護者の願いを把握して、支援に生かすようにしたり、キャンプから帰って来たときに、迎えに来た保護者を対象に、子どもたちのキャンプでの様子を伝える個別面接の時間を設定した。一人一人についてキャンプでの成長を保護者と分かち合い、家庭での振り返りに生かし、学校復帰やこれからの生活に有効につなげて欲しいという思いで実施した。また、保護者同士が短い時間ではあるが情報交換し合う場も設定し、今後のキャンプ同窓会の充実や親同士のネットワーク化につなげていきたいと考えた。

キャンプ終了後の親面接の様子

秋キャンプが終了し、センター到着後すぐに、一人一人の保護者を対象に、キャンプでの子どもの様子や成長を伝え、保護者と情報を共有し、今後の学校復帰や生活に生かしていきたいと考え、個別面接を実施した。

適応指導教室との連携

キャンプに参加する子どもたちの普段の様子や、不登校に至った経緯などの基礎情報は、適応指導教室のスタッフや学校のスクールカウンセラーや相談員の方から収集した。また、適応指導教室のスタッフの中には、キャンプスタッフとして参加して頂いた方もおり、常に情報交換しながらよりよい支援に生かすことができた。キャンプ終了後には、子どもたちの活動の様子をまとめた「キャンプだより」を配布したり、キャンプ後の変容などについても情報を寄せてもらい、次回のキャンプの計画の参考とすることができた。

平成16年9月1日 発行

平成16年度 合同体験学習

キャンプだより <夏号>
群馬県総合教育センター 教育相談G

夏季キャンプに行ってきました！

平成16年8月10日（火）～8月13日（金）3泊4日、群馬県立桐生南少年野外活動センターにおいて平成16年度 合同体験学習<夏季キャンプ>（主催：群馬県総合教育センター）が実施されました。

事前に2回のキャンプオリエンテーションを実施しました。そこで、子どもたちは、食事作りの計画を立てたり、課題解決に向けた活動を企画したりしました。

キャンプでは、食事作りや活動をともにして、子どもたちは新しい自分と出会い、互だちと分かち合える関係を築いていきました。最終日、別れを惜しむ子どもたちの姿は感動的でした。

【1日目】ラケットベース・初めての食事作り

分団にセンターをバスで出発！ 昼食を食べた後、入所式。最初の活動プログラムは、ラケットベースボールでした。子どもたちは、スタッフとともに野外を走り回りました。最初の食事はバーベキューでした。協力して準備をすすめ、おながいっぱい食べました。おいしかったね。イカを上手にさばいてみせる子、小さい子に教えてあげる子・・・。一人一人が自分らしさを発揮し始めました！



【2日目】鍾乳洞探検、化石探しと登山

早朝からかまどにまきをくべてで食事作り、お昼のお弁当も一緒に作りました。

2日目の活動プログラムは、鍾乳洞探検と化石探しコース、朴の木山（ぼくのきやま）登山コースを巡んで実施しました。いずれのコースを回った子どももやり遂げた後のさわやかな表情が印象的でした。

夜のキャンプファイヤーでは、みんなで歌い、踊ったね。花火がとってもきれいだったね。幸せな気持ち～！！

【3日目】川遊びとさよならパーティー、さもだめし

3日目の活動プログラムは川遊び。朝の4時半に到着して川で魚を釣ってきた子もいたよ。ますのつかみ取りや思い思いの川遊びを発見してみんな楽しんでね。夕食は「さよならパーティー」。各グループが作ってくれたごちそうをおながいっぱい食べました。幸せ～！さもだめしでは、子どもたちだけでグループや順番を決められたね。キャンプを通して、みんなの心がどんどん近づいていきました。明るく笑い声が響いていました。



秋季キャンプのお誘い

平成16年10月5日（火）～8日（金）
実施場所：北毛青年の家
詳しくは、教育相談Gまで

【4日目】別れたくない！みんな、ありがとう！！

いよいよキャンプ最終日になってしまいました。退所式は、子どもたちもスタッフも奮り進もうようにして座っていたね。こんなに仲良くなれてうれしいよ。素敵な出会いをありがとう！！